

ウィズ／ポスト



芹澤 武

東京工業大学物質理工学院応用化学系
[152-8550] 東京都目黒区大岡山2-12-1-H121
博士(工学), 教授.
専門は生体高分子.
serizawa@mac.titech.ac.jp
<http://www.serizawa-cap.mac.titech.ac.jp/>

「ウィズ／ポスト」といった言葉が目に入り、数年前にピンと来る方はいなかったように思う。それが今や、おそらく誰もが認識できる言葉になり、1日でも早くウィズ・コロナを終えて、ポスト・コロナを迎えたいと思われているに違いない。社会全体はもとより、筆者が奉職している大学の日常も否応なく変化した。それらの変化には、良いことや悪いことがさまざまにある。折角の機会をいただいたので、大学におけるこの2年間の変化について、多少のメッセージとともに思い付くままに書かせていただく。

コロナ禍における大学の変化として、講義のオンライン化について触れない訳にはいかない。オンライン講義は、ちょうど2年前の4月から多くの大学ではじまり、受講する側も実施する側も大きな戸惑いと不安を感じていたかと思う。筆者もオンライン講義に耐えうる資料の準備、実施方法や話し方、期末試験への対応など、試行錯誤の連続で、それまでに経験したことがない緊張感をもって毎回の講義を迎えていた。インターネット接続の環境やプライバシー保護などの観点から、通常、学生側のカメラはオフになっており、画面に映った資料を見ながら独り言のように話す訳である。学生の目を見て様子を伺い、興味や理解の有無を自分なりに肌で感じながら進行していた対面講義とは大違いであった。

オンライン講義も悪いことばかりではない。遠方から通学している学生にとっては、移動の必要がなく、時間的および体力的なメリットは大きいに違いない。対面講義では着席する場所によって板書の見え方や教員の声の聞こえ方はまちまちである。しかしながら、オンライン講義では板書や資料は画面を通じてクリアに見ることができ、説明もよく聞こえる。聞き漏らしがあったり、欠席したりしても録画を視聴することができる。講義室も必要ない。オンデマンド講義も併用すれば、講義形態がより柔軟になり、学生も教員も時間を効率良く使うことができる。丸2年のオンライン講義を経験すると、学生も教員もだいたい慣れてきたように思う。少し前に学部生と話す機会があった。曰く、オンライン講義は楽をしようと思えばいくらでもできるので、その時間をどう過ごすか、むしろ対面よりも

意識を高めて受講している、とのことである。しばし感心するとともに、学生側の意識の変化を実感した。対面とオンライン講義の分け方や、通学・通勤時間を考慮した講義時間帯の設定など、多少の配慮と工夫は必要であるが、ポスト・コロナの時代にもオンライン講義(あるいはハイフレックス講義)を残していい気になっている。筆者の大学では現在、昼休みを長くとった変則的な時間設定となっており、午前中は自宅でオンライン講義、午後は対面講義(学生実験など)といった具合になっている。1日の講義終了時刻が遅くなるデメリットはあるものの、きわめて合理的で最適解の一つに感じている。

研究室活動も様変わりした。以前の研究報告会では、メンバーが狭い部屋にひしめき合うように集まって議論を交わしていた。また、何かしらの理由をつけては親睦会を開催し、研究室旅行にも出かけるなどして濃密な関係を築いていた。これらはすべてなくなった。今年のはじめに、およそ2年ぶりに研究室メンバー全員が一つの部屋に集まり、博士論文発表会の練習を行った。発表と模擬質疑応答が終わった後に、いつものように筆者がコメントをはじめた。練習の成果を称えた後に、修正すべき点を指摘したのだが、その発言に対してメンバーからどっと笑いが起こった。意図しなかった反応に研究室学生の感覚の変化をあらためて実感した。卒業生からはこの2年間で企業での働き方や上司・同僚とのかかわり方が大きく変わったと聞く。育児・介護休暇なども取得しやすくなったのかも知れない。筆者もそうであるが、家族との時間や趣味に費やす時間などが増えたのではないかと思う。この4月に就職した修士学生は、結局、従来型の濃密な時間をほぼ共有することなく巣立っていった。個人的には従来型へのノスタルジーを今も感じているが、決して以前の価値観や様式に戻る必要はなく、また、戻ることもしないと思う。むしろ、この経験を糧に、持続可能な新たな様式を築いてほしいと願っている。

2022年2月中旬の現在、第6波がようやくピークアウトしようとしている。1日も早いポスト・コロナを迎えることを願いつつ、本稿を閉じたいと思う。